

## śirovinimaya : 「頭／首」に関する覚書き

金 沢 篤

先年、筆者は「シャンカラの我論」を探る一環として「心臓」“hr̥daya”について小論を草した。人間存在の本質たる「我」と「心臓」の関係を中心に、人間の身体における「心臓」の持つ役割を考察したわけだが、その折りに、では「心臓」と並んで、人間の身体のやはり重要な構成要素と思われる「頭／首」“śiras”の方は、どのように位置付けられるのか？という素朴な疑問をも抱くに到った。すなわち、(古代)インド人にとって、「頭／首」は、どのような役割を担うものとして考えられていたか？という問題である。インド古来の文献に色々当たってみても、「心臓」を意味する“hr̥daya”程ではないにしても、「頭／首」を意味する“śiras”の類は散見する。ということで、本論は、そうして集められた「頭／首」を巡るわずか二三の用例を用いて、インド人にとっての「頭／首」の持つ意味とそれを扱う際の問題点などを少しく検討するものに過ぎない。

トーマス・マンによって見事に現代小説に翻案されたインドの説話に、「すげかえられた首」がある。われわれにとっては、ソーマデーヴァによる大部の説話集『カター・サリット・サーガラ』中、独立に『屍鬼二十五話』として知られるものの第6話がとりわけ有名である。この『屍鬼二十五話』は、「トリヴィクラマセーナ王は悪修行者の奸計に瞞され、遠方の墓地の樹上から死屍を運んで来ることを約束する。勇敢な王は死屍を肩に担って歩むが、その中に宿るヴェーターラ(死屍に住む魔類)は、途中の憂さを晴すためという口実を設けて、難問を含む物語を始め、その解答を王に迫る。しかし王が沈黙を破ってこれに答えるや否や、死屍は再び元の樹上に戻り、王はその度ごとにこれを取りに行く。」(辻1 195頁24-29行)もので、以下に考察の中心として据えられる部分は、その一「物語」(第6話)としての「すげかえられた首」中の、「ヴェーターラ」が「王」に対して「解答」を迫る「難問」と、それに対する「王」による「答え」である。

筆者が今主として関心を寄せるのは、つまりこの物語なのである。が、もとより複雑な伝承と共にあるだろうモチーフとしてのその物語などではなしに、あくまでも今日、われわれの手元にある『カター・サリット・サーガラ』内の『屍鬼二十五話』である。その中の「すげかえられた首」である。

すなわち要点だけをかいつまんで記せば以下のようなになる。結婚後まもない美しい女性マダナスンダリーがいる。その愛する夫と実兄が、理不尽にも、共にみずからの首を切って死んでしまう。その事態に絶望して、自分もその後を追おうとするマダナスンダリーに対して、以下のような神からの救いの言葉が投げかけられる。それに基づくその信心深い女性マダナスンダリーのその後の修復作業で、なんとか最悪の事態は回避され、死んだ二人の男は蘇生するのである。何とも荒唐無稽な話ではあり、その背後に特異で大きな一つの複雑な宗教・思想の枠組みをうかがわせるものでもあるが、これこそが、筆者の目下拘泥するインド哲学上の重要な一問題にみごとに棹さしたものと言えるのである。

(0)……

saṁśleṣaya śiraḥ svam svam bhartṛbhrāṭṛkabandhayoḥ /  
 uttiṣṭhatām te jīvantāvetau dvāvapi madvarāt // 45  
 etacchrutvaiva saṁtyajya pāśaṁ harṣādupetya sā /  
 avibhāvyātirabhasādbhrāntā madanasundarī // 46  
 bālā bhartṛśīro bhrāṭṛdehena samayojayat /  
 bhartṛdehena ca bhrāṭṛśīro vidhiniyogataḥ // 47  
 tato'kṣatāṅgau jīvantāvubhāvuttasthatuśca tau /  
 śirovinimayājījātasamkarau kāyayor mithaḥ // 48

(KSS, p. 420, ll. 45-48)

(0) 「……夫と兄の胴体にそれぞれの頭を継ぎ合わせなさい。私の恩寵により、彼らが二人とも再生せんことを！」

マダナスンダリーはそれを聞くや、輪繩を捨て、喜んで〔二つの死体〕に近づきました。ところがすっかりあわてて取り乱し、よくよく考えもせず、彼女は夫の頭を兄の身体に継ぎ合わせてしまいました。——これも運命のしからしめたことでありましょう！ それから、二人の男は、傷一つなく、生き返って立ち上がりました。頭を交換してしまったので、肉体的にはお互い混じり合っていたのですが。(上村1 64頁上段5-7行)

この、これからの議論の重要な前提となる部分自体の詮議を十分に行う余裕のないのは遺憾の極みであるが、それでも今は最低限、次のことだけは確認しておきたい。

「頭の交換／首のすげかえ」“śirovinimaya”。「頭／首」“śiras”と「胴体」“kadanbha”が対比されている点。またこの「胴体」は、“deha”と同置され、その「頭／首」と「胴体」の結合によって得られる〈全体〉が、“kāya”と表現されている点である。さて、

この物語のその後の展開は、残念ながら屍鬼によっては語られない。残されているのは、そうした首のすげかえ物語を踏まえて屍鬼より王へ突きつけられる難問と王による解答ばかりである。そして、筆者がここで問題にしたいのは、その王による解答である。

この話の徹底して奇妙な点は、話のすべてが、主人公の女性マダナスンダリーの観点で描かれている点にある。つまり頭と胴体がちぐはぐ状態で蘇生した二人の男、夫と兄の立場からではなしに、その二人を前にして当惑する一人の女性の立場からである。その事態は、それを眺めている他ない読者たるわれわれの立場よりすれば、まったくもってもどかしいものがある。蘇生した当人たちの意識こそが問題とさるべき筈なのだが、そういう展開は隠されたままである。無理からぬことかも知れない。

(i) tadbrūhi rājanko bhartā tasyāḥ saṃkirṇayostayoh /

pūrvoktaḥ syāt sa śāpate jānāno na bravīṣi cet // 51

ityākarnya kathāpraśnaṃ rājā vetālatastataḥ /

sa trivikramaseno'tra tamevaṃ pratyabhāṣata // 52

yatsamsthāṃ tatpatiśiraḥ saiṣa tasyāḥ patistayoh /

pradhānaṃ ca śiro'ṅgeṣu pratyabhijñā ca tadgatā // 53 //

(KSS, p. 420, l. 39–p. 421, l. 2)

(1) 「そこで王様、答えなさい。このように混同した二人の男のうちで、どちらが彼女の夫でしょうか。もし知っていながら答えなければ、前に言った呪いがあなたにかかるよ」

屍鬼からこのような物語と質問を聞いて、トリヴィクラマセーナ王は彼に次のように答えました。

「二人のうちで、夫の頭がついている方が彼女の夫である。頭は身体のうちで最

も重要なもので、自己の認識は頭に依存するのであるから (上村1 64頁下段6-14行)

筆者は、これによって、以下の4つの点に注目したい。いわば、この4点を明確にする端緒を得ることが、小論のささやかな目的なのである。

- (a) “saṃkīrṇayos” というのは一体どういう意味か？
- (b) “yatsaṃsthaṃ tatpatiśiraḥ saiṣa tasyāḥ patistayoḥ” は一体どういう意味か？
- (c) “pradhānaṃ ca śiro’ṅgeṣu” は一体どういう意味か？
- (d) “pratyabhijñā ca tadgatā” は一体どういう意味か？

先ず (a), <1> A(ś)-A(k), <2> B(ś)-B(k) としてあった兩人 AA と BB が首のすげかえの結果, <1> A(ś)-B(k), <2> B(ś)-A(k) として, つまり AB, BA という二人の人物として蘇ったのである。この “saṃkīrṇa” という形容詞は一体この二人のどういう事態を形容する語なのか? 上村博士の「混同した二人の男」というのはどういう意味なのか? ということである。動詞 “saṃ√kīṛ” の過去受動分詞としての “saṃkīrṇa” という形容詞が, 単項限定形容詞か, 多項限定形容詞かという問題である。必ずしも明確ではないが, 一つには次のように考えるべきであろう。AB ないし BA が, AA ないし BB のように純一な存在ではなく, その様態が, 「混じり合った状態」「合成人間」であることを表現しての「混同した」 “saṃkīrṇa” である。つまり単項限定形容詞と解する立場である。だがその場合には, 冒頭(o)の部分における “jātasamkarau kāyayor mithaḥ” の部分の “saṃkara” との関係はどうか? “mithaḥ” の解釈如何では, その部分は「肉体的にはお互い混じり合っていた」となり, 両者には微妙な意味のずれが生ずるように見えるからである。つまり, 多項(二項)限定形容詞と解する可能性である。後で大いに問題にしたい, 辻直四郎博士の訳では, それぞれ, 「混同された彼ら二人のうち」(辻1 130頁10行), 「身体においては互いに違和を感じつつ」(同) である。また, トーニー訳では, それぞれ, “thus mixed together” (Tawney, p. 208, ll. 2-3), “their bodies had become mixed together” (Tawney, p. 207, ll. 29-30)。さらにルヌー訳では, それぞれ, “des deux personnes ainsi confondues” (Renou, p. 69, ll. 31-32), “il y avait confusion quant à leur personne” (Renou, p. 69, ll. 23-24) である。すべて似たりよったりとも言えそうではあるが, 筆者の意図しているのは, 種々解釈における厳密微妙な差異の闡

明である。だがこの点に関しては、今はその結論は保留としたい。

ついで問題になるのが、(b)である。「このように混同した二人の男のうち、どちらが彼女の夫でしょうか。」という屍鬼の問いかけに対する王の答えとしてあるその文の訳文「二人のうちで、夫の頭がついている方が彼女の夫である」には、全然問題がない、ように見える。が、そのサンスクリットのテキストをどのように受け止めると、そういう訳文が出てくるのだろうか？ と、敢えて問うのも、筆者などのサンスクリットの学習にとって常に最重要な導き手であられた故辻直四郎博士が、その部分に対して、以下のような驚くべき解釈と訳文を示されているからに他ならない。

(ib) *yatsamsthaṃ tatpatiśiraḥ saiṣa tasyāḥ patistayoḥ*

(i'b) *yat samsthaṃ tat patiśiraḥ saiṣa tasyāḥ patis tayoh*

(1'b) 存続するのは夫の首である。彼ら二人のうち、彼（夫の首を持つ者）こそ彼女の夫である。（辻1 130頁10-17行）

そう長いものでもない(ib)は、確かに難解そのものである。それを辻博士は、(i'b)のように読まれた。そして(1'b)のように訳文を示されたのである。これは訳文だけを読んでも意味が不明である。そもそも「存続するのは夫の首である。」という部分の意味がわからない。一体何のことだろうか？ 筆者は、その部分が収録された書物の「サンスクリット学習者のための読本」という性格からしても、辻博士のここに見られる作業は誠意に満ちたものだと理解できるが、解釈としては完全に破綻していると考える。以下のように解釈すべきではあるまいか。ハイフンが、その両側の成分よりなる複合語としての筆者の解釈を示すものであることは言うまでもない。

(i''b) *yat-samsthaṃ tat-patiśiraḥ saiṣa tasyāḥ patis tayoh*

(1''b) その二人のうちで (tayoh), 彼女の (tat-) 夫の頭が、そこ (yat-) に存続しているところの、その者こそ (saiṣa) が、彼女の (tasyāḥ) 夫である。

上村博士の訳文「二人のうちで、夫の頭がついている方が彼女の夫である」も、またその上村博士によって「訳文は流暢であるが、ほとんど英訳からの重訳」（上村1 304頁4-5行）と評された泉芳璟氏の訳文「二人のうち、夫の首のある方

が彼女の夫であるべきだ。」(泉 76頁13行)も、フランスの碩学ルヌー博士の訳文“Celui des deux sur lequel est fixée la tête du mari, il est bien le mari.”(Renou, pp. 69, l. 36–p. 70, l. 1)も、筆者の解釈とほぼ同一と見なし得る。そもそも上村訳、泉訳、ルヌー訳のみならず、明らかな誤読を犯したと考えられる辻博士の訳も、可能な限り原文に忠実に解釈せんとした筆者の訳にしても、結局は同じところに帰着する。そしてこれらのどの一つとして、これら全てに遥かに先行して、以下のような名訳を世に送ったトーニーの偉大な業績を越え得たものはない、と言うべきであろう。

(1”b) “That one of the two, on whom her husband’s head was fixed, was her husband, ... ”(Tawney, p. 208, ll. 6–9)

だが、筆者の見るところ、辻訳はサンスクリット原文と直に対面した独創的な解釈を示したものと言えるが、上村訳も泉訳もルヌー訳も、共にこのトーニー訳に比してルーズである。ただ拙訳だけは、全くトーニーと同じ解釈を示していると思う。単に「夫の頭が」(上村1)「夫の首の」(泉)“la tête du mari”(Renou)とは違う。トーニー訳のように、また拙訳のように“her husband’s head”(Tawney)「彼女の夫の頭が」(拙訳)とあるべきなのである。辻博士が“yat”に呼応する“tat”と誤解された“tat”は、上引(i)の1行目の屍鬼の設問中の“tasyāḥ”を受けたものとしての“tat”であろう。

さて、以上で、本稿の核心とも言うべき(c)(d)に、立ち向かう前提が整ったと考えられるべきであろう。つまり、一人の人物を形作っている身体を、大きく「頭／首」と「胴体」と二分割した場合、前者を重視する一つの見解が示されたのである。「頭／首」が大事か? 「胴体」が大事か? という設問に対して、「頭／首」こそが大事! と考える者の存在が、文献的に裏付けられたということである。

「心臓」こそが大事である、重要である。何故なら、「我／アートマン」は、そこそそを拠り所としているから、というのが前記拙論で得られたシャンカラなどの見解だったのである。そして、その「心臓」は「頭／首」部ではなしに「胴体」部に存している、とわれわれは無条件に考えているようなのだ。筆者の頭の中には、常に「頭／首」と「心臓」はどちらが重要なのか? という設問が渦巻いているのである。

そこで、(c)である。問題の「頭／首」の持つ意味を端的に表現している筈の“pradhānaṃ ca śiro’ṅgeṣu”の部分の解釈であろう。“pradhāna”と“aṅga”の

意味である。特に前者は、重要な気がする。「そして、頭は諸々のアングの中で、プラダーナである」。この “aṅga” と “pradhāna” の意味を問題にしたい。「頭は身体のうちで最も重要なもの」(上村1)、「肢体のうち最も重要なのは首である」(辻1 130頁16行)、「身体のうち、首というものが最もすぐれたもの」(泉 76 頁13-14行)、“la tête est la partie essentielle du corps” (Renou, p. 70, ll. 1-2), “the head is the chief of the limbs” (Tawney, p. 208, l. 8) とあって大同小異 と言うべきかも知れない。が、この場合にも、トーニーが与えた “chief” という 訳語が断然光彩を放っているように見える。

ここで、インド古来の有名な医学書『チャラカ・サンヒター』を参照してみよ う。

(ii) prāṇāḥ prāṇabhṛtām yatra śritāḥ sarvendriyāṇi ca /

yad uttamāṅgam aṅgānām śiras tad abhidhīyate // 12 //

(CS, p. 99, c. r., ll. 35-36)

(2) <sup>プラナー</sup>氣息をもつ [すべての生物] の氣息が存在する場所であり、かつ、すべての知 覚器官が存在し、しかも身体諸部分のなかで最も重要な部分が「頭部」であると 言われている。(矢野 116頁下14-16行)

“uttama-aṅga” を矢野氏は「最も重要な部分」と解釈される。果たしてそれで いいのか？ 注意をすべきは、この “aṅga” である。これに関して、やはり『チ ャラカ・サンヒター』には以下のようにある。

(iii) mahac cārthas ca hṛdayam paryāyair ucyate budhaiḥ // 3 //

ṣaḍaṅgam aṅgam vijñānam indriyāṇy arthapañcakam /

ātmā ca saḡuṇas cetas cintyam ca hṛdi saṃśritam // 4 //

(CS, p. 183, c. r., ll. 27-29)

(3) マハットとアルタは<sup>フリダヤ</sup>心臓の同義語であると賢者たちによって言われている(3)。 六部分を持つ身体・意識・感覚機能・五つの対象・属性を伴うアートマン・思考 器官・思考の対象は [すべて] 心臓に依存している(4)。(矢野 230頁上段5-9行)

(iv) tatrāyam śarīrasyāṅgavibhāgaḥ ; tad yathā — dvau bāhū, dve sakthinī, śirogrīvam, antarādhiḥ, iti ṣaḍaṅgam aṅgam // 5 //

(CS, p. 337, c. l., ll. 31-33)

(4) そこで、身体に対する、肢体区分とは、以下のものである。すなわち、二つの 腕、二つの腿、頭と首、中間部 [胴体] といった六肢分よりなる肢体である(5)。

(42) śirovinimaya: 「頭／首」に関する覚書き (金沢)

(拙訳)

つまり、インド古代の医学書の中では、「頭／首」“śiras”は、「身体」“śarīra = kāya”の6肢体の一つ、と考えられていた。そして矢野氏によれば、「最も重要な部分」とのことである。また、その部分には、「氣息」“prāṇa”が存し、かつ「すべての感覚器官」“sarvendriya”が存している、と言われた。確かに「目」「耳」「舌」「鼻」「皮膚」という五感はすべて「頭／首」に存していて、それこそが他の肢体にはない重要な特徴であろう。だが、果たしてそうだろうか。

では“pradhāna-aṅga”と“uttama-aṅga”，はどういう意味であろうか？ これらの意味を探る上で、以下の三つの用例を引いておくのも無駄ではあるまい。

『ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド』の冒頭句に対するシャンカラ注に以下のように述べられている。

(v) śiraḥ prādhānyāt / śiraś ca pradhānaṃ śarīrāvayavānām /

(TPUSBh, p. 610, l. 24)

(5) 「頭」，主要なものであるが故に。また、頭は身体各部の中で主要なものである。(拙訳)

『バガヴァッド・ギーター』には以下のような一節が存する。

(vi) vaktrāṇi te tvaramāṇā viśanti

daṃṣṭhrākārāni bhayānakāni //

kecid cilagnā daśanāntareṣu

saṃdṛśyante cūṃpitair uttamāṅgaiḥ // 27 //

(BG, XI-27: p. 168, l. 25-p. 169, l. 3)

これに対する上村博士の訳を試みよう。

(6) 急いであなたの口に入る。牙が出て恐ろしい、恐怖をもたらす口に。ある者たちが歯の間にくわえられ、頭を砕かれているのが見える。(二七) (上村2 97頁8-9行)

ここで上村博士によって「頭」と訳されているのが“uttama-aṅga”である。ここでは、「最重要な肢体」とも訳し得る筈の“uttama-aṅga”は、単に「頭」の同義語として扱われており、それが持っても良い筈の「最重要な」意味などは、無視されている。敢えて言うならば、ここでは明らかに、身体を構成している、各肢体のうちの「最上位の部分」，「一番上の部分」，という意味で，“uttama-aṅga”が使われているように見えるではないか！



さらに『マヌ法典』には以下のような一節がある。

(vi) uttamāṅgodbhavāj jyaiṣṭhyād brahmaṇas caiva dhāraṇāt /  
sarvasyaivāsya sargasya dharmato brāhmaṇaḥ prabhuḥ // 93 //

(MS, p. 25, ll. 4-5)

インドのヴェーダ体制の根底をなすヴァルナ制度の起源を宣揚するこの重要な箇所に対する渡瀬信之氏の訳はこうである。

(7)ブラーフマナは、身体の最上部より生まれたがゆえに、最初に生まれたがゆえに、そしてヴェーダの保持者であるがゆえに、〔自らに定められた〕本来の生き方（ダルマ）に従って、このいっさいの世界の主である。（渡瀬 35頁11-12行）

ここで「身体の最上部」と訳されているのが、“uttama-aṅga”である。注釈の“mukhaṃ” (MS, p. 25, l. 6) をそのまま採用したのか、先の『バガヴァッド・ギーター』に対する上村訳のように、田辺繁子氏の訳ではただ「口」（田辺 37頁12行）とあるばかりである。

この部分で、改めて銘記すべきは、“pradhāna”, “uttama” の意味は簡単には決定し難い点、また、それらが何を意味するかは不明であるにしても、何に冠せられた形容句であるかの意識が不可欠である点とであろう。

ついで、(d)の“pratyabhijñā ca tadgatā”?

この部分の解釈もそう簡単なものではない。改めてこの箇所のトーニー訳の全文を引こう。

(1cd).....for the head is the chief of the limbs, and personal identity depends upon it. (Tawney, p. 208, ll. 8-9)

「プラティアビジュニャーは、それ [=頭／首] に関する／存する」ということで、泉訳「人を見分ける目印はこれ」（泉 76頁14行）、辻訳「〔個人の〕認知はもっぱらそれによって行われる」（辻1 130頁16-17行）、トーニー訳は、表現は微妙に異なるが、基本的には同じ解釈と見なし得る。ルヌー訳 “c'est par elle qu'on reconnait le reste” (Renou, p. 70, ll. 2-3) は一見不可解であるが、「人物全体の認知は頭に依存する」と解し得るので、やはり上記三訳と同解釈と言ってよいだろう。ところが「自己の認識は頭に依存する」とある一番新しい上村訳だけは全く不可解である。「自己の認識」とはいったいどういう意味だろう？ どのように解釈するとこのような訳が生まれるのか？

有名な『シャクンタラー姫』の次の一節を見てみたい。

(44) śirovinimaya : 「頭／首」に関する覚書き (金沢)

(vii) rājā—priye, krauryam api me tvayi prayuktam anukūlapariṇāmaṃ saṃ-  
vṛttam / yadāham idāniṃ tvayā pratyabhijñātam ātmānaṃ paśyāmi /

(AS, p. 232, ll. 9-10)

(8)王 姫，余がそなたに加えたむごい仕打ちも，仕合せな結末を見ることになり  
申した。さればいま余は，そなたに見識っていただきたいのじゃ。(辻2 174頁1-  
2行)

(8')王 どうだろう，わしのそなたに加えたむごい仕打ちも，こうして仕合せな  
結果を見ることになったのだから，今こそわしを思い出してくれないか。(岩本  
326頁中段16-19行)

(8'')王 愛しき人よ，もし，今そなたがわしを認知してくれるならば，そなたに  
加えられたわしの惨き仕打ちも，万事めでたしとなるのじゃがなあ。(拙訳)

ここに見られる “praty-abhi√jñā” という動詞に基づく，“praty-abhi-jñā” と  
いう名詞は，一般に「再認」と訳されて，ある場合には重要な哲学的意味を含意  
するものである。もしかしたら，この「すげかえられた首」物語と無関係ではな  
いかもしれぬ，シヴァ教の内部では，次のように用いられて，重要な役割を果た  
す。

(ix) pratyabhijñā ca—bhātabhāsamānarūpānusamdhānātmikā, sa evāyaṃ caitra  
—iti pratisamdhānena abhimukhībhūte vastuni jñānam ; loke'pi etat-putra eva-  
mguṇa evaṃrūpaka ity evaṃ vā, antato'pi sāmānyātmanā vā jñāstasya punar  
abhimukhībhāvāvasare pratisamdhita-prāṇitam eva jñānaṃ pratyabhijñā—iti  
vyavahriyate ; nṛpatiṃ prati pratyabhijñāpito'yam—ity ādau /

(IPV, p. 20, ll. 5-12)

(9)さらに，「再認」とは，かつて認識され，現在認識されつつある形態の結合か  
ら成立するものである。すなわち，「この者は，他ならぬかのチャイトラである」  
といった，回想に基づく現に対面している事物に関する知である。世俗において  
も，その人物はこんな徳性を持っている，こんな形態をしている，といったよう  
な，あるいはまた，極端に言っても，一般的に知られたものに対する知が，再度  
対面した際に，息を吹きかえすのが「再認」であると言われている。王様に対  
して，この者は再認された，等といったように。(拙訳)

「再認」に関しては，今はこれで十分であろう。問題の箇所は，「[ある人物の]  
再認は，そ[の，頭]に関して[成立する]のである」というほどの意味である

う。人の識別は、「頭／首」によってなされる、したがって「頭／首」は、そのためにも重要である、ということである。その点に関しては、「すげかえられた首」説話の別の伝承たる『ブリハト・カター・マンジャリー』の中のものは以下のようにあってすこぶる興味深い。

(x) śrutveti rājā provāca yasyā bhartṛmukhaḥ patiḥ /

śiraḥ sarvendriyādhāraṃ sakalaṃ hi kalevaram // 417 //

(BKM, p. 321, ll. 11-12)

(10)……と聞いて王様は、次のように応えました。彼女の、夫の顔を持つ者が、[彼女の] 主人である。頭は、すべての感覚器官を持つ、完全な肢体であるから。  
(拙訳)

つまり、ここには、「頭／首」“śiras”という言葉ではなしに、われわれにはよりわかりやすいものである筈の「顔」“mukha”という言葉が用いられているのである。

さて、以上で筆者に許された時間が尽きた。もとより粗雑な覚書きに過ぎない本稿ではあるが、以下に若干のコメントを付して、稿を結びたい。

インド古典の様々の文脈の中に現れる「頭／首」に関して、概してその研究理解が未だ十分ではなく、「頭／首」の持つ役割を端的に表現するかのような形容句，“pradhāna”，“uttama”に関しても、今後のよりきめ細かな検討が必要ではないか。

人間の身体を構成する一肢体としての「頭／首」は、単にそれにとどまらず、やはり特別の意義を持つ肢体である。そしてそれが持つ重要さは、腕や脚のない人間は存在し得ても、「頭／首」のないものは存在し得ない、「頭／首」を切ったなら、その者は絶対生きていくことが出来ないという点に関連している。

梵我一如のヴェーダーンタ哲学との絡みで簡単に総括するならば、このようなものとなるだろうか。「頭／首」は重要である。これこそ、その個体の〈個性〉を担うものである。アトマンの拠り所たる心臓は常に〈普遍性／共通性〉に直結しているように見える。そうした時に、とにかく「頭／首」は重要であろう。一体誰が死ぬのか、そして一体誰が蘇生するのか、また、一体誰が解脱するのか？ 個性豊かな個人が解脱するのである。その個性を集約的に体現するものこそ、「頭／首」と言えるのである。

(46) śirovinimaya: 「頭／首」に関する覚書き (金沢)

略号

AS: Abhijñānaśākuntalā (Kale Ed., Motilal, 1980)

BG: Bhagavadgītā with Śāṅkarabhāṣya (Motilal, 1981)

BKM: Bṛhatkathāmañjarī (Panini, 1982)

CS: Carakasamhitā (KashiSktS. 228, 1984)

IPV: Īśvarapratyabhijñāvimarśinī, Vol. 1 (KashmirS., 1918)

KSS: Kathāsaritsāgara (Motilal, 1977)

MS: Manusmṛti with the Commentary of Kullūkabhaṭṭa (Motilal, 1983)

TPUSBh: Ten Principal Upanishads with Śāṅkarabhāṣya (Motilal, 1978)

Renou: Contes du Vimpire (Paris, 1963)

Tawney: The Ocean of Story, Vol. VI (Motilal, 1984)

泉: 『呪術の王国: 憑鬼25話』 (北宋社 1991年)

岩本: 『インド集: 世界文学体系4』 (筑摩書房 昭34年)

上村1: 『屍鬼二十五話: インド伝奇集』 (平凡社 昭53年)

上村2: 『バガヴァッド・ギーター』 (岩波文庫 1992年)

田辺: 『マヌの法典』 (岩波文庫 昭28年)

辻1: 『サンスクリット読本』 (春秋社 1975年)

辻2: 『シャクンタラー姫』 (岩波文庫 1977年)

矢野: 『インド医学概論』 (朝日出版社 昭63年)

渡瀬: 『マヌ法典』 (中公文庫 1991年)